

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第138号

イザヤ 65:1

平成19年3月30日

さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来た。すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。その顔は、いなずまのように輝き、その衣は雪のように白かった。番兵たちは、御使いを見て恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。すると、御使いは女たちに言った。「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらんください。ですから急いで行って、お弟子たちにこのことを知らせなさい。イエスが死人の中からよみがえられたこと、そして、お会いできるということです。．．．」そこで彼女たちは、恐ろしくはあったが、大喜びで、急いで墓を離れ、弟子たちに知らせに走って行った。するとイエスが彼女たちに出会って、「おはよう。」と言われた。彼女たちは近寄って御足を抱いてイエスを拜んだ。すると、イエスは言われた。「恐れてはいけません。行って、私の兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えるのです。」．．．十一人の弟子たちは、ガリラヤに行って、イエスの指示された山に登った。そして、イエスにお会いしたとき、彼らは礼拝した。しかし、ある者は疑った。イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。マタイ 28 章

イエス・キリストが十字架上で亡くなられ、埋葬された後、甦られたのは、「安息日（土曜日）」の次の日、すなわち、「週の初めの日（日曜日）」でした。日没時、午後6時から一日が始まるユダヤ暦はローマ暦よりも六時間早く一日が始まるので、ローマ暦の土曜日午後6時過ぎには、ユダヤ暦ではすでに「週の初めの日」が始まっていたわけで、これ以降、日曜日の夜明け前までのいつか、イエスは甦られたのでした。ニサン月の十四日午後3時に亡くなられたイエスが十字架から下ろされ、あわただしく埋葬されたのを見届けた二人のマリヤは十七日の早朝、イエスの墓に向かいました。イエスが十字架にかかれた週はたまたま「大いなる安息日」に「週毎の安息日」が続いたため、戒めにしたがって二日間埋葬の処置ができなかったので十七日まで待ったのでした。埋葬のための香料を塗ることばかりを考えていた二人には、三日目に甦るとのイエスの言葉を思い出す余地はありませんでした。

旧約の時代、神がモーセに命ぜられたイスラエルが守るべき「主の例祭」の最初の「聖なる会合の日」は、「主の安息日」でした。六日間は仕事をし、「七日目は全き休みの安息」の日とする戒めは、荒野で与えられた天からのパン、マナを七日を周期に集める作業を通してイスラエルの民の生活パターンとして四十年かけて習慣づけられたのでした。それほど大切なのが、この神を覚える安息日なのです。同時に、『十戒』の四番目のこの掟は、奴隷や在留異国人や家畜も安息日には労働から解放され休むことができるという憐れみ、人道的配慮が意図された、神の本質を反映する掟でもありました。旧約の掟に生きるユダヤ教徒たちは神のご命令に忠実に今日も、神が祝福し、聖であるとされた安息日（ローマ暦の金曜日午後6時から土曜日午後6時）の礼拝を守り続けています。

さて、イエス・キリストが甦られたのは、週毎の安息日（七日目）の翌日の八日目、日曜日でした。七日を周期とする神の創造のパターンで言うなら、創造の初日である「第一日目」は日曜日です。天地創造されたとき、神は「労働の」第一日目に光に命じて原始の闇を克服され、夜から朝へと移る一日を定められました。ユダヤ暦で一日が日没から始まるのは、神の創造のパターンに則してのことです。神は六日間、創造のわざに従事され、創造の「完成を告げられた」後は安息に入られたのでした。創世記には、第六日までは夕があり朝があったと記録されていますが、第七日目は夕も朝も宣言されていないことから、創造の完成以来人間史がこの七日目に繰り広げられていることは明らかです。32CE ニサン月の十七日（専門家の算出によれば、西暦32年四月六日）、イエス・キリストの死人からの甦りという画期的な出来事が起こらなかったならば、私たちは今日まだ七日目に象徴される時代に生きているということになるでしょう。しかし、神が安息から立ち上られ、新しい創造に取り掛かれた時代がもう始まったのです。「見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。．．．わたしのために造ったこの民はわたしの榮譽を宣べ伝えよう」（イザヤ3:19-21）と預言者イザヤが仰ぎ見て告げたメシヤの時代がイエス・キリストの甦り、すなわち、人類初の永遠のいのちへの甦りで成就、現実のこととなったのでした。最初の人類の神への反逆以来、サタンが手をつけて墮落させた肉のからだはもはや十字架上で釘付けに

されて滅び、神の旧創造はイエス・キリストの甦りのからだに象徴される新しい時代、新創造、「新しい事」に取って代られたのでした。

八日目は、七日を周期とする神の創造のパタンで言えば、まさに創造の第一日目で、キリストの甦りの出来事を境に、神の新創造の時代に突入し、イエスを人類を罪から解放する「救い主（キリスト、メシヤ）」として受け入れる者すべてに、同じ新創造が起こること、すなわち、罪のゆえに死すべき肉のからだに永遠に生きる霊のからだ（甦りのからだ）に変えられるという約束が、保証となったのです。神はもはや安息してはおられません。メシヤによる贖いの時代は新創造の時代で、イエスが、「わたしの父は今に至るまで働いておられます」（ヨハネ5：17）と言われたように、神が再び創造に関わられる第一日はすでに信じる者たちの間で始まったのです。ヘブル語聖書の創世記で創造の初日に言及している聖句「こうして夕があり、朝があった。第一日」で用いられている「第一日（ヨム エハッド）」は、絶対的存在を示す言葉で、二日目以降に用いられている用語とは異なっているようです。二日目以降は第一日が存在した結果初めて、相対的に存在するのであって、第一日に依存し、また、「第六日」にだけ定冠詞が用いられていることから、創造の秩序はこの周期で完成したことが強調されていると解釈されています。

このように、神の八日目の新創造は旧創造の第一日目と同じようにもう始まったのです。「今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。．．．おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です」（コリント第一15：20-23）とパウロは、キリストの甦りがそれに続く者たちの甦りの保証であることを力説しました。また同じ文脈の中でパウロは、もしキリストが甦らなかつたら、「罪の赦し」、すなわち、「贖い」が達成されなかったことになり、私たちのキリスト信仰はむなしく、信者たちはただ自分の罪の中に滅びに向かって生きているにすぎず、キリストを信じてすでに死んだ者たちは滅んでしまったことになること、したがって、キリストと福音を宣教する意味がなくなることを訴えています。私たちが、私たちの罪が赦され、永遠に神の大家族の一員として生きることができるとは、新創造を画する最初の日、第八日の出来事に依存していたのでした。キリストの“初穂としての甦り”を約束どおり成就してくださった神は、新しい霊のからだに今は天上におられるキリストが、再び地上に『ユダヤ人のメシヤ（王）』として戻って来られる『再臨の日』に向けて少しでも多くの人たちが贖われ、永遠のいのちに与ることができるよう、全人類の救済のため余念なく働いておられるのです。このようにしてイエス・キリストを受け入れた者は、すなわち、本質的に罪深い自分を罪から解放してくださり、「死」ではなく「いのち」へと導いてくださる「救い主（解放者）」としてイエスを告白した者はすでに新創造の時代に生きているので、旧約の諸掟にも、安息日の掟にも縛られることはないのです。しかし安息日が律法よりも先に与えられたマナを通して習慣づけられたことは銘記すべきです。

残念ながらキリスト教界ではこの「安息日」の解釈があいまいで、キリストが甦られた日曜日をクリスチャンが礼拝を守る「安息日」として導入してしまったために、大きな問題を残してしまったようです。クリスチャンは新約の時代に入って礼拝の恒例日が旧約の土曜日から日曜に「変わった」と信じ、ユダヤ教徒たちは、神が制定された永遠の掟、安息日をクリスチャンが勝手に日曜日に「変えてしまった」と主張して譲らないのです。どちらの主張が正しいのでしょうか。聖書は明白な答えを与えています。神が新しい創造に着手されたことをキリストの甦りのからだを見て確信したイエスの弟子たちは、もう過ぎ去った“過去の創造からの休息日”を記念として祝うのではなく、新しいからだ、新しいいのちの所有が確実となったことをほめたたえ、歓び楽しむ日として、日曜日に、甦りの主を仰ぎ、礼拝するようになったのでした。実際、イエス昇天後、弟子たちが集まっていた「五旬節の日」も、「パンを裂くために集まった」のも「週の初めの日」、日曜日でした。キリスト信仰に生きる者たちにとって、神の旧創造を覚える「安息日」ではなく、旧創造にまさる偉大なわざ、全人類の救いのための「贖い」が達成された新創造の時代の到来が確認された「週の初めの日」を礼拝日とすることは至極当然の成り行きでした。

他方で、キリストの初臨（御降誕）によって「安息日」が廃止されたのでないことも、また、再臨後廃止されるのでないことも聖書は明確に語っているのです。二千年前、イエス・キリストをユダヤ人のメシヤとして受け入れることを拒否し、今もなお“真の”メシヤが到来することを待っている、旧創造の時代に生きているユダヤ人にとって、安息日を守ることは第一優先です。イエスご自身、贖いのわざを成し遂げられるまでは、父なる神が命ぜられた掟に従って、弟子たちと共に安息日にユダヤ教の会堂シナゴグで礼拝を守り、主の例祭にはエルサレム神殿への巡礼を守られるなど、律法に忠実に生きられたのでした。しかも、キリストが再臨されて千年間支配されることになる神の国においても、安息日が守られることを預言者たちは語っているのです。キリスト支配のこの神の国では、ユダヤ人たちが全員イエス・キリストを受け入れ、初めて真の「神の証人」として大宣教に乗り出すことが預言されているのに安息日厳守とは実に不思議です。エゼキエル書に詳細に記されているように、キリスト支配の神の国に建てられるエルサレム神殿においても安息日は明らかに言及されており、したがって聖書は、安息日は安息日として、神の旧創造のわざを覚える日として神の定め通り、守ることを奨励しているのです。イエスは、終わりの日がいつ来るのかという弟子たちの質問に答えられた忠告の中で、ユダヤにいるクリスチャンたちが、反キリストなる人物の迫害から逃れるためエルサレムを離れ、山へ逃げなければならない日が“冬や安息日にならないように”祈りなさいと言われましたが、このように、新約聖書にも、安息日が教会の時代にも守られることを前提としてイエスが語られた例があるのは興味深いことです。安息日には公共の交通機関が利用できないことに加えて、行動に多くの規制があるので、父なる神の掟に忠実であろうとするユダヤ人クリスチャンにとって行動の規制に苦しむ日となることは間違いのないのです。律法に先立って創造のときにすでに定められた「安息日」は、掟に服従するがため守る日ではなく、守ることが人にとって恵みになる、神を覚え、神にささげる日として、教会の時代にも、キリストの千年支配の時代にも守られることは神の摂理なのです。キリストが再臨されるまでは、神の摂理を完全に理解することは誰にもできないことなので、各自に顕された真理に従って歩むことを聖書は奨励しているのです。